

## エブリデイ・エブリナイト

さくら

マコ

佳織

黒田

岩下

双子（姉）

双子（弟）

勇作

一軒の家、世の果ての。

1

夜。

シナリオライターの石本さくら、仕事をしている。

玄関に人の気配がして。

イラストレーターの森マコ、現れる。

さくら「おや」

マコ「こんにちは」

さくら「こんばんはでしょ」

マコ「お、仕事しとるね。はい。プリン」

さくら「なに、どうしたの」

マコ「しばらく、やっかいになります」

さくら「ええ」

マコ「あら、だめ？」

さくら「ああ。ちょっと、めずらしく」

マコ「めずらしく、なに。あ、そうか、仕事か。映画？」  
さくら「ならまだいいけど。ラジオドラマ書いてて」  
マコ「そっか。邪魔かな、あたしお邪魔になるかな」  
さくら「いやいや、あー。うー。そうなったらそうなったモードで行こうかな」  
マコ「あ、そ。じゃそうして。なに、モードって」

と、マコ、プリンを食べる。

マコ「うま。夜道は相変わらず、暗いな。あかりつけたら、玄関」  
さくら「でも、ここだけの問題じゃないから」  
マコ「そうだけど。ケモノになった気分でごここまで走ったよ」  
さくら「わ。そういや、マコ、ケモノっぽいね」  
マコ「なにいまさら」

さくら、冷蔵庫から、お茶とか出して。プリンを食べる。

さくら「あ、そうか。辞めたのか、あの仕事」  
マコ「ああ、はるみ緒方のママクックでしょ」  
さくら「すごいすごいって思ってたのに」  
マコ「え、あんたが、うそでしょ。興味ないでしょ」  
さくら「ないけど、マコがイラスト描いてたら、買うよ」  
マコ「で読まないでしょ」  
さくら「うん。読まないけど、絵は見るさ」  
マコ「あ。それ、いやだな。本のイラストって読んでこそ、絵の本質がわかるんだから。ま、でも描かないことになったんだけど」  
さくら「なんで、辞めたの。いい仕事じゃない」  
マコ「いろいろあってさ」  
さくら「そうか」  
マコ「だって、ごはんまずそうなんだもん」  
さくら「あー。それは、いかんな」  
マコ「まあね。無理だとは思ってたけど。われながら、早かったな」

さくら「ちょっと、そんなとこで寝ないでよ」  
マコ「あ、寝ません。……寝ませんよ」

さくら「連絡ぐらいしたらいいのに」  
マコ「ああ。そうね。そうだけど、気づいたら東京駅で切符買ってた、ごめん」

2

朝。

土方佳織が朝ごはんを食べている。台所には、さくら、朝ごはんの支度。

マコ、目を覚ます。

佳織「おはようございます。外は、夏らしい朝ですよ」

マコ「誰」

佳織、食事を続ける。さくら、目玉焼きを持ってきて。

さくら「隣の土方さんちの佳織さん。毎朝、タマゴ届けてくれるの」

マコ「ごはん食べてるよ」

さくら「ああ。なんか、そのまま食べていくのが習慣なの」

マコ「へー」

さくら「マコも食べる」

マコ「うん」

さくら、台所へ。

マコ「どうも。森マコです」

佳織、笑顔で食事。

さくら、目玉焼きを持って来る。

さくら「いただきます」

マコ「う」(頭痛)

さくら「ああ。やっぱり」

マコ「そっか、飲んだんだ。……うわ、これ(一升瓶)あけたんだ」

さくら「いろいろとご相談に乗っていただき、ありがとうございます」

マコ「え。あ、そう。覚えてない」

さくら「いいのいいの。聞いてくれたら、それでいいの」

マコ「さくら、なんともないの」

さくら「うん」

さくら、食べる。

マコ「隣の土方さんちって、誰も戻って来てないでしょ」

さくら「え、あ、うん。おじいさんもおばあさんも、市内のほうで亡くなったみたい」

マコ「ああ。避難所で」

佳織「はい。今は、私一人で住んでいます」

マコ「そうですか」

さくら「佳織さん、私の先生。裏の畑の。知ってた。なんか、野菜作るのって、化学の知識が必要なのよ、ねえ。

佳織さん。すごいんだから」

佳織「いやあ」

さくら「で、とうとう、なすび、できたのよ。うちの畑で」

マコ「へー。去年は、ダメだったのにね」

さくら「佳織さんのおかげよ」

佳織「もともとの土がよかったんですよ」

さくら「よ。野菜マイスター佳織」

佳織「はは」

佳織、食器を片付けて。

佳織「ごちそうさまです」

と、台所に去り、「さよなら」と家を出る。

さくら「はい。また、あしたー」

マコ「じゃ、さくらと一緒にだね。実家に一人ぼっちって」

さくら「その事情には違いがありますがね」

マコ「あ、そう」

さくら「なんか、嫁ぎ先で、うまくいかなかったみたい」

マコ「そうか」

さくら「眼底骨折。こっちの目の奥。旦那に殴られて」

マコ「げっ。やーね、全く」

さくら「ピカソの絵みたいだったでしょ、こっちの目」

マコ「それ失礼だろ」

さくら「ピカソに」

マコ「佳織さんにでしょ」

さくら「あ、ごめん」

マコ「私にあやまらなくていいよ」

マコ「あーもー。こういうことあると、ますます、男いらねーってなるな」

さくら「でも、マコはもうその心配は通り越してるわけでしょ」

マコ「どういう意味よ。通り越すって」

さくら「なんていうかな。こう、ある境地に達してるっていうか」

マコ「人を仙人みたいに言わないでよ」

さくら「あ、今日マコどうすんの」

マコ「どうすんのか。なに、ぐだぐだするよ」

さくら「ああ、そう」

マコ「え、それ追い出しモードじゃん。モードチェンジしたんでしょ。歓待の心はどこ行った」

さくら「いや、そうじゃなくって。ちょっと、お昼から買い出し行ってこよって思って」

マコ「いわき」

さくら「そうそう。一緒に行く？」

マコ「今日はゆっくりする」

さくら「そっか。じゃ、留守番しててくれる」

マコ「うん」

さくら「大丈夫？できる、お留守番」

マコ「あのさ、私をいくつだと思ってるの」

さくら「でもイノシシとか来るから」

マコ「え。イノシシ」

さくら「最近、多いのよ」

マコ「へー」

さくら「裏の畑、守ってね。ケモノからなすびとか守ってね」

マコ「お、おう。え、でも、出るの、マジで」

さくら「出る出る」

マコ「ええ」

さくら「野犬とかも出る」

マコ「野生の王国じゃん」

さくら「このへん、いたるところケモノの通り道だから」

マコ「え、でも、出たらどうすんの、私、わーイノシシ出たーって見てるしかないけど」

さくら「ああ、まあ、ほとんど昼には出ないよ」

マコ「そう。それならいいけど」

さくら「なんかあったら、佳織さんに電話して。これ番号」

マコ「はい」

マコ「え。佳織さん、どうすんのイノシシ」  
さくら「捕獲するのよ」  
マコ「えー。どうやって」  
さくら「猟銃で」  
マコ「す、すごい」  
さくら「こっちの目で狙いを定めて、ズドーン」  
マコ「わー、すごいすごい」  
さくら「スナイパー佳織。ズドーン。……ズドーン」  
マコ「百発百中だー」

3

その夜。  
マコ、スケッチブックと色鉛筆を荷物から出して、整理している。

マコ「あ、帰ってきた」（玄関へ）

さくら「ただいまー」  
マコ「わ。お酒臭い。え、なに」  
さくら「どうぞどうぞ、あがって」  
黒田「いいんすか」  
さくら「いいから、あがれあがれ」  
岩下「失礼しまーす」

マコ「なに、この人たち」  
さくら「黒田さんと岩下くん」  
黒田「黒田です」  
岩下「岩下です」  
さくら「帰りに電車で一緒になって。浜通り旅行してるんだって」  
黒田「これ、どうします」（買い出しの荷物）  
さくら「あ、じゃ、ナマモノは冷蔵庫にお願いします。あ。それも台所のほうに、やー助かった、ありがとねー」

黒田と岩下、台所に荷物を運び入れる。

マコ「飲んだの」  
さくら「ああ。うん、ちょっとね駅前で」

マコ「学生？」

さくら「違うんじゃない。お腹減ってるっていうから」

マコ「え、お金出したの」

さくら「うん」

マコ「全部？」

さくら「うん」

マコ「え、またあ、たかられてんじゃん」

さくら「だって、面白いのよ、この人たち。ねー。あれやってあれ、さっきのあれ」

黒田「はいはい、また、後で」（と来る）

さくら「あ、こちらが森マコさん。私の親友。で、絵描きさん」

黒田「すみません。突然お邪魔して」

マコ「いえいえ」

さくら「岩下くんは写真撮ってるんだって。ね」

岩下「はい」

さくら「なんか、ブログとかやってんでしょ」

黒田「ええ。旅先に美味しいものとかレポートしてます」

さくら「はい、じゃあ、記念写真」

4人で記念写真。

岩下「あ。じゃちょっと、もう少し、近づいてもらって」

さくら「あ、はい」

黒田「フェイスブックに載せませーす」

さくら「はい」

マコ「あ、そういうのちょっと、私あれなんで」

黒田「ああ、そうすか。じゃ、こいつ今度、仙台のギャラリーで個展開くんで、その時にでも」

マコ「それもやめてください」

黒田「あ、はい」

岩下「じゃ、撮りますよ。はい。オッケーノ」

岩下、なぜか首を傾げ。

岩下「もう一度行きますー。オッケーノ」

岩下、首を傾げ。

さくら「え、まだー」

黒田「なんか、こだわりあるんすよねー」

岩下「……オッケーノ」

さくら「いけたあ」

岩下「えー。はい」

皆、ばらける。

さくら「きみたち、なんか飲む？」

黒田「はあ。いや、けっこう、飲みましたよ」

さくら「台所になんでもあるんで、適当にやってくれたまえ」

岩下、家の中の写真を撮っている。

岩下「割と古い家ですよ。昭和とかですか、できたの」

さくら「うちのおじいさんの代じゃないかな」

カメラをマコに向けるので。

マコ「ちょっ、やめてって」

黒田「いやーでも、スナック蟻地獄ってすごくないですか」

さくら「ああ、名前でしょ」

黒田「名前もだけど。ママさんすげー美人で、びっくりしました」

さくら「ずーっとやってるのよね、あそこだけは。昔は、もっと、いくつかあったんだけどね、お店も」

岩下「ここ奥もあるんですか」

さくら「うん」

岩下「見えていいですか」

さくら「いいよ。座敷に泊まる？布団とかあるから、適当にやってね」（と寝る）

黒田「あざーす」

マコ「お座敷は、私いるから、離れはどう」

黒田「あ、そうすか、離れもあるんすか」

マコ「じゃ、こっちついて来て」

黒田「はーい。失礼しまーす」

岩下に続いて黒田も、奥へ。マコが案内する。



さくらの寢息。

マコ、戻って来て。

マコ「ちょっと、そこで寝ちゃダメだって。ほら、仕事するんじゃないの。ラジオドラマ」

さくら「ちょっとだけ、ね。あれ、マコ、なんでいんの、今、私、夢見てるのかな」

マコ「もー」

マコ、さくらにタオルケットをかける。

さくら「……古い家がそんなに珍しいのかな」

マコ「え、なに、寝言？」

男たちの笑い声。

マコ「大丈夫か、あいつら」

さくら「……悪さする顔には見えないよ」

マコ「見えるよ」

黒田、戻って来て。

黒田「座敷も、むっちゃ広いすね。掛け軸、なんて読むんですかね」

マコ「臥薪嘗胆」

黒田「へー。あら、さくらさん寝たんですか」

マコ「うん、そうみたい」

黒田、缶ビールを開けて、飲む。

黒田「ひー。うまいっすねー。エビス」

マコ「……」

黒田「あー。ここかー。ここで書いてるんですねー。石本さくらさん」

岩下、来て。さくらのパソコンの写真を撮りまくる。

黒田「あ。岩下、ビール飲む」

岩下「お、じゃ、いただきますかな」

黒田「おれら、さくらさんのファンなんすよ」

岩下「え。おまえ、なんか、見たことあんの」

黒田「ない。おまえは」

岩下「ないよ」

黒田「いや、だってさ。テレビとかやってないって言ってたよ」

岩下「さっき、会ったばかりでファンとか失礼だろ」

黒田「でもさーさくらさん、いい女じゃん」

岩下「そういう意味でファンてこと」

黒田「そうそう」

二人、笑う。

マコ「おまえらさ、それ自分で買ったの」

黒田「え。あ、いや」

マコ「缶ビールくらい自分で買えよ」

マコ、二人の缶ビールをもぎ取り。

マコ「うるせえし、とっとと向こう行ってくれ。な、離れに布団敷いたから」

岩下「なんだ。このお婆はん」

マコ、岩下のカメラをもぎ取り、

岩下「あ」

カメラの中のSDカードを抜いて、自分の口に入れる。

岩下「あ。食べた」

マコ、もぐもぐ。

岩下「わー」

岩下、マコの口へ手を入れようとする。黒田、マコを捕まえて。

黒田「出せよ。出せよ。おい、出せよ」

さくら、目を覚まして。

さくら「え、なにしてんの。なに、やってるのよ。やめなさいよ」(と、3人に参戦する)

4人は、混沌のうちに闘争を継続する。

4

昼。

さくら、パソコンで工作中。奮闘しヒートアップする気分をうちわで時々清涼。

そこにシャワーを浴びて来て、くつろぐマコ。

マコ「あー。気持ちいい。水風呂、気持ちいい」

髪をかわかす。

マコ「ふー」

マコ「ね。カルピス飲む？」

さくら「うん」

マコ「わいわいわいわい。カルピスカルピスー」

マコ、台所へ行き、さくらの机の上にカルピスを置く。

マコ「あー。暑い。暑いといいなー。田舎の夏、いいなー」

マコ「扇風機、当たってる？」

さくら「うん」

マコ「あー。でも、夏、嫌いじゃない」

マコ「さくらもシャワー浴びたらいいのに」

さくら「うん。あとで」

マコ「あ、さくら、氷溶けるよ、カルピス」

さくら「あーもー。うるさい」

マコ「え」

さくら「うるさいよ」

マコ、スケッチを用意して、さくらの後ろ姿を描く。

マコ「西瓜を食べてた 夏休み。水まきしたっけ 夏休み。ひまわり 夕立 夏休み」(鼻歌)

さくら、急にカルピスを飲みほし。マコを見て笑う。

マコ「え、なに」

さくら「いや。座敷の掛け軸」

マコ「うん。どうした」

さくら「ない」

マコ「え！」

マコ、見に行く。戻って来て。

マコ「ほんとだ、ない。え、なんで」

マコ「ええ！うそ。あいつら」

さくら「たぶんね」

マコ「わー。くそー」

さくら「そうとしか考えられないでしょ」

マコ「えー。私の寝てる間になってこと」

さくら「よっぽど困ってるんだな」

マコ「はらたつなー。臥薪嘗胆も読めなかつたくせに」

さくら「あんなの二束三文でしょ。虫食いだらけだったし」

マコ「ほか盗られてないの」

さくら「たぶん、大丈夫だと思うけど」

マコ「え。じゃ、臥薪嘗胆だけってこと」

さくら「うん。家中確かめたら、なんかなくなってるかもしれないけど」

マコ「いやー。あいた口が塞がらないね」

さくら「マコの子感が的中したね」

さくらとマコ、作業に戻る。

マコ「じゃ、あたし、寝顔、見られたってこと」

さくら「まーねー」

マコ「ま、いいか、寝顔の一つや二つ」

さくら「そんな、やつらも、じっと見る余裕ないでしょ」

マコ「そーね」

さくら「マコ、寝顔、かわいいよ」

マコ「え。うそ」

さくら「かわいいかわいい」

マコ「初めて言われた」

マコ「寝顔美人か」

さくら「うん。そうそう」

マコ「やだ。寝顔美人。もてそうにないし」

さくら「なんで」

マコ「私、実は、寝顔美人なんです。とか、言えないじゃない」

さくら「え、なんで」

マコ「なんか、一緒に寝るの誘ってるみたいだし。相手はしかも起きてなきゃいけないし」

さくら「あー」

マコ「そーっと来て、そーっと持ってったのかな」

さくら「ああ。うん」

マコ「抜き足差し足で」

さくら「うん」

マコ「広げたまんま」

さくら「外出て巻いたね、きっと」

マコ「広げたまんま、抜き足差し足はかなりまぬけだよ」

さくら「だって、あれ、巻くと音出るもん。シュルシュルシュルって」

マコ「あー。じゃ、外で巻いたな」

マコ「忍者みたい」

さくら「え」

マコ「忍者みたい」

さくら「そう？」

マコ「忍者、あんなの持ってるでしょ」

さくら「ああ、忍法が書いてあるみたいなの。いや、それにしちゃでかいよ」

マコ「あ、そうか。邪魔だよ」

しばらくして、さくら、小刻みに笑う。

マコ「え」

さくら「いや、だって」

マコ「え、なに」

さくら「なんだっけ、写真撮ってたほう、名前忘れちゃった」

マコ「ああ、岩下」

さくら「そうそう、岩下。その岩下が、写真撮る前にさ、オッケーノって」

マコ「え？」

さくら「オッケーノ」

マコ「ああ、言ってた、オッケーノって。あれなにオッケーノって」

さくら「うう、だめ、おなか痛い」

マコ「はい。オッケーノとか、言ってた」

さくら「うぐうぐぐぐぐ」

マコ「オッケーはいいとしてもさ、ノがわかんないな」

さくら「やめて」

さくら、ひとしきり笑って。仕事に戻る。

マコもスケッチを続ける。

5

夜。食後。

マコ、さくらにポーズをとらせ、本格的に肖像画を描いている。

マコ「ちょっと、動かない」

マコ「なんかね、さくら、今日はね、私、いいもの描けそうよ」

さくら「のど渴いたな」

マコ「がまんがまん」

さくら「あー。私もドラマが書きたいよー」

マコ「がまんがまん」

さくら「恋愛ドラマ、純愛物が書きたいよー」

マコ「無理無理」

さくら「なーんで私だけこんな目にあってるのかなー」

マコ「あ。そうだ。あんたの書くシナリオの、映画のタイトル、なんとかしてよ。友達になかなか言えないんだけど」

さくら「ああ」

マコ「肉棒になった男とか。解放されたエロ下着とか」

さくら「まーねー」

マコ「干からびた陰毛とか」

さくら「まーまー題名なんか口に出して見に行くもんでもないでしょ。内に秘めて銀幕に対峙する、それがいい映画の鑑賞法」

マコ「干からびた陰毛を内に秘めたくないよ」

さくら「わりといい題名だと思うけどな」

さくら「あー。もー。ビール、飲ましてくれー」

マコ「がまんがまん」

双子が縁側に来て、スイカを食べる。

マコ「お。なんだ」

さくら「あ、双子」

マコ「スイカ食ってる」

さくら「さては、近所の畑で盗んで来たな」

マコ「え、双子？ま、似てなくもないが」

さくら「二卵性らしいよ。お姉さんはどっち」

双子（姉）、手をあげる。

マコ「じゃ、そっちは弟か」

さくら「おい。たね飛ばすな」

さくら「おいこら。たね飛ばすなって」

さくら「しっ。向こうで食え、向こうで」

マコ「そんな、犬じゃないんだから」

玄関で、「こんばんは」と佳織の声。

さくら「あ、佳織さんかな。動いていいですか」

マコ「許可します」

さくら、玄関へ。

マコ「きみたち、いくつ。とし、何歳？」

さくらの声、「えー」と聞こえる。

マコ「小学生、中学生、高校生じゃないよな。……え、もしかして学校とか行ってないの」

さくら、戻って来る。

さくら「あのね。佳織さん、好きな人できたんだって」

マコ「へー」

さくら「なんかねなんか、いわきの人で。バーテンダーなんだって。お店も任されてるみたい」

マコ「へー」

さくら「背も高いって。かおりんと釣り合うくらいに。わあー」

マコ「うれしそうね」

さくら「うれしいわよ。だって、よかったじゃない、佳織さん」

さくら「私はね、佳織さんにみたいな人にこそ、幸せになってほしいのよ」

さくら「で、今度の日曜日に、紹介したいから彼氏連れて来るって」

マコ「へー。パーティー。お披露目パーティー」

さくら「カクテルとか作ってくれるかしら」

マコ「ドライマティーニとかサイドカーとか」

さくら「マルガリータとか」

マコ「グラスのフチとかに、塩まぶしてあってさ」

さくら「塩？」

マコ「そう、塩よ塩」

さくら「塩、まぶすって？」

マコ「いいよ、もう」



さくら「きみの瞳に、乾杯とか言って」

マコ「ひょー」

マコ「はい。じゃ、さっきのポーズとって」

さくら、肖像画のポーズ。

さくら「わ。双子、まだ、いた」

マコ「いいじゃん、いても」

マコ「帰らなくていいの。家の人、心配するよ」(と、双子に)

さくら「親とかいないんじゃないかな」

マコ「え、あそう」

さくら「ここいらの空き家で寝泊まりしてるみたいけど」

マコ、絵を描く。

マコ「ね、私も、幸せになっていいよね」

さくら「え、いいに決まってるでしょ」

マコ「ってというか、私たち。私たちも。私たちにもよ」

さくら「なに、言ってるの」

マコ「ねねねねね。私たちにも、幸せがやって来るかな」

双子も黙って二人を見ている。

さくら「うーん」

マコ「私はロダンじゃないんだから。ポーズ、考える人になってるよ」

6

深夜。

さくらは仕事に疲れて眠ったようだ。

マコ、廊下を通り過ぎる。便所に行って、戻ってくる。

マコ「さくら、そっち行っていい」

さくら「いいよ」

マコ、さくらの枕もとにちょこんとすわる。

マコ「ね、聞いて。さっき、双子の夢を見た。双子の片一ぽうがとっても饒舌なの」

さくら「どっち」

マコ「どっちかな。ま、姉でいいわ」

双子（姉）「つくる時はレゴブロック。そう、小さな断片の積み重ね。それをどんどん小さくしていく。すると、それらは空間から時間の次元へ、力の水準へと移行するのだ」

さくら「どういう意味」

マコ「わかんない」

マコ「私はね、なんか、その夢を見ながら。ものをつくるじゃない私たちも。その私たちがものをつくるときの考えかたを言ってるんじゃないかと思ったの」

さくら「もう一人の双子はどうしたの。双子はいつも二人で一つよ」

マコ「うん、それでね。もう一ぽうの双子は」

さくら「弟のほう」

マコ「そう弟のほうは」

双子（弟）、悲しげに立っている。

マコ「それを言う、姉さんのほうを見ながら、ただ立っているだけだった」

さくら「なにも言わないで」

マコ「ええ。黙って悲しい顔してた」

7

日曜日の昼。

食卓を囲んだ人々。佳織と勇作を中心に、さくらとマコ。そして双子。

乾杯の準備がととのって。

マコ「さくら、乾杯の音頭」

さくら「お。わたくしが？」

マコ「一応、家主だし」

さくら「はい。では、佳織さんとえっと」

マコ「いつもはなんて呼んでるの」

佳織「あ。えと。勇作さん、です」

マコ「ゆーさくさん。ひゅー。ゆうさくさん」

さくら「勇作さんは、かおりんのことを、かおりん？」

勇作「いや、ま、普通に佳織さんですけど」

佳織「え」

マコ「あ、違うの」

勇作「ああ、まあ、佳織とかも、ですね」

マコ「ワオー。かおりー、まい、らぶー」

さくら「じゃ、佳織さんと勇作さんのこれからを祝しまして。乾杯」

皆「かんぱーい」

さくら「これが、マコさんがつくった、肉じゃがとコロッケ。ポテトサラダ」

マコ「ごめんなさい。芋的なものばっかで」

佳織「おいしそう。ねえ」

勇作「うん。大好物です」

さくら「男の人って、芋が好きなのよねー」

マコ「え。そうなの。あーえー。そんなつもり全くなかったですよ。そんな、男の人が芋が好きだからって、私、芋料理の代表格を並べたわけじゃないですよ」

さくら「マコ、誰も誤解してませんので」

マコ「あ。そーう」

さくら「はい。で、こっちがフライパンで私がつくった円盤餃子っす」

佳織「わー。おいしそう、ね」

勇作「ええ。見事なできですね」

さくら「えーそうですかー」

マコ「いただきまーす」

皆「いただきまーす」

皆、食べる。みんな、おいしいの連発。

さくら「おい、手で掴むなって」

さくら「あんたも、箸あんだろうが」

さくら「手で食うなって。箸箸」

勇作「今日は、なんか、ご近所のかたから、お呼ばれがあるって佳織さんに聞いて、ちょっと恐縮してたんですけど。と、いうのも。こういうのなんか、おれ、慣れてなくて。でも、みなさんいいかたばかりで。……さくらさんもマコさんも。そして、双子のみんなも、ありがとう。……サンキュー。サンキューフォーおいしい料理。サンキューフォーユアカインドネス。ああ。えっと。それから、佳織さん。佳織。大事な佳織。これからもよろしくな。……ありがとうございましたー」

皆、拍手する。

勇作「あ。よかったら、飲みにきてください」(カードを渡す)

さくら「ほー。スタンディングバー、ゴホウビ。へー」

勇作「立ち飲みのなあれなんで、とっても気楽です」

マコ「佳織さんもよく行くの」

佳織「ええ」

マコ「そこでくどかれたとか。がは」

佳織「ええ。で、そのときいきなりキスされて。帰り道ですけど。そのキスの仕方のあざやかさと言ったらなかったんで、びっくりして、そのあざやかさ、うまさ、あ、うまいなでとどまればよかったんだけど、それってけっこうこの人のキス、経験豊富なんじゃないかとか、ちょっとした不安のサイクルに落ちちゃいました。でも、そういうふうじゃいけないと思うんです。キスのうまさ、そのキスのうまさあざやかさにうっとりした感触をしっかりと感じるべきでしょ。そのうまさの根拠とかに気持ち持ってかれたら、いけないと思うんです」

さくら「こら、子供には毒だ。耳ふさげ」(双子に)

佳織「おいしいこの餃子！」

さくら「え、もう終わり？」

さくら「終わりだって」(双子に)

8

マコの肖像画の世界。

マコとさくらの声のガイド付き。

絵に描かれた人物は舞台上にポーズをとる。

さくら「あ、スケッチブック。見ていい」

マコ「うん。いいよ」

さくら「ずいぶん描いたわね。ここに来てからでしょ」

マコ「暇だったからね」

さくら「ああ。これ、黒田かー。絵にするとそんなに悪い顔してないけど」

マコ「私の描き方がいいんだよ」

さくら「これ見て改心しろっての」

さくら「こっから下描かなかったの」

マコ「ああ。なんだろうね。不浄な気がして」

さくら「わかるわかる。股関節の感じとか、キモかったもん」

さくら「わ、出た、岩下」

マコ「オッケーノ」

さくら「オッケーノ岩下」

マコ「写真撮りすぎだっつーの」

さくら「あんたやっぱ感じつかむのうまいね」

マコ「ま、ね。一応、プロだから」

さくら「いやー。まざまざと思い出しちゃうな」

マコ「二人、一緒のやつとか、あるよ」

さくら「うわー。なにこれ、はらたつなー。絵、鑑賞するっていうより、怒りが蘇るよ」

マコ「オッケーノ」

さくら「あ、双子」

さくら「どっち」

マコ「弟」

さくら「ああ。こっちが、お姉さん」

マコ「で、これは、二人揃っての肖像画」

さくら「やっぱ、似てるわね」

さくら「あ。佳織さん」

さくら「どうしてこっち側の横顔にしたの」

マコ「どうしてかな」

さくら「なんか、悲しそう」

マコ「優作さん」

さくら「おーイケメンね」

マコ「これは二人のポートレート」

さくら「幸せになってほしいね」

マコ「うん」

さくらとマコ、歌う。

エブリデイ・エブリナイト

エブリデイ・エブリナイト

ただよう毎日の そのわけを

目を細めて 見てみれば

僕たち2人 うまく行きさ

この目でグッと つかまえよう

エブリデイ・エブリナイト

エブリデイ・エブリナイト

さあこの目でグッとつかまえて おこうね

空には風が 吹き荒れてても

だれもがいつも 知らん顔してるから

しっかり僕をつかまえて

その胸でグッとつかまえて

あなたが僕をつかまえて

この時をグッとつかまえて

ねえホラ いつでも わかるように

その目でホラ いつでも わかるように

空には風が 吹き荒れてても

だれもがいつも 知らん顔してるから

(作詞 佐藤伸治)

さくら「ね、私のポートレートは」

マコ「まだ、できてない」

9

夕方。夏の終わり。

マコ、夕暮れどきに、佇んでいる。

マコ「お盆過ぎると、風がかわる」

マコ「東京がわたしを呼んでいる」

双子（姉）が立っている。

マコ「お。なんだ。きみか」

マコ「私のセリフ聞こえた？」

マコ「聞こえていたら、恥ずかしいな」

双子（姉）「……お盆過ぎると、風の中にも秋が混じります」

マコ「そうね」

双子（姉）「ときがたてばわかります」

マコ「そうか」

双子（姉）、いつのまにか、去る。

血相をかえたさくら、来る。

さくら「双子が死んじゃった」

マコ「え。今、だって」

さくら「国道6号線を海のほうへ渡るところで、南下するダンプに轢かれちゃった」

マコ「あー」

さくら「もう一人は助かったんだけど。行方が分からなくなって、近所のみんなで探してるの」

マコ「あ、だから、今、会ってた私」

さくら「え」

マコ「双子に会ってた」

マコ「会って、あれ、なんかしゃべったよ」

さくら「え。どっち」

マコ「どっちだろ。どっちが死んだの」

さくら「だから、わかんない」

マコ「死んだのはね。弟のほう」

さくら「どうして」

マコ「だって、私、夢で見たもの。だから、よくわかる。死んだのはあの子よ。弟のほう」

マコ「私が、あんな夢、見たばかりに」

さくら「そんなの関係ないでしょ」

10

朝。

荷造りして、マコがいる。

喪服に着替えたさくら、来て。

さくら「あ。帰る」

マコ「うん。お世話になりました」

マコ「喪服じゃん」

さくら「うん。近所のみんなでお葬式出すことになった」

マコ「そう。もう片一ぽうは、見つかった？」

さくら「まだ。そもそも最初からいなかったんじゃね説がささやかれている」

マコ「どういうこと」

さくら「一人しかいないのを、私たちが勝手にダブって見ていたってこと、蜃気楼みたいに」

マコ「ああ。なるほど。死体になって初めてわかったってこと」

さくら「そう。だって、あの双子が一体どこの誰だか、誰もわかってなかったんだから。本人もなにもしゃべらないし」

マコ「でも、そんなことある。一人を二人にダブって見るなんて」

さくら「世にも奇妙な話よね」

マコ「じゃ、私は、なにを見たんだろう」

さくら「それ、絵でしょ」

マコ「うん？」

さくら「それよ。私の肖像画でしょ」

マコ「うん」

さくら「描けたの」

マコ「ああ、うん」

さくら「見せてよ」

マコ「やだ」



さくら「なんで」

マコ「恥ずかしい」

さくら「マコに恥ずかしいとかあるの」

マコ「あるよ。さくらを描いたのならある」

さくら「え。なんで」

マコ「喪服のきみーは、すすきのかんざしー、るるるールルウルー。妙に色っぽいね」

さくら「浴衣でしょ」

マコ「なんか、神崎先生が亡くなったときを、思い出す」

さくら「ああ。大学のときの」

マコ「さくら、あのときも、そんな喪服着てた。私、まだ、そんなの持ってないから、ジーンズ履いて、ここに腕章はめて出席したの覚えてる」

さくら「え。あれ就活用のスーツよ」

マコ「あ、そうなの」

さくら「マコが就活してなかっただけでしょ。みんな黒いスーツで来てたよ」

マコ「そうか、あれ、喪服じゃなかったのか」

さくら「まあ、喪服みたいなもんだけど」

マコ「私、あのときから、みんなから浮いてた気がするな」

さくら「そうね。マコはずっとマイペースよ」

マコ「絵。そこの壁にかけとくから、お葬式からかえったら見て」

さくら「うん」

さくら「じゃ。またね。いつでも遊びにおいでよ」

マコ「うん」

さくら「ただし、今度は事前に連絡ちょうだい」

マコ「はい」

さくら、去る。

マコ、身支度を整え。

マコ、壁に絵を掛ける。

それをしばらく見つめて。